

# オリンピックに関わった人とのふれあい

進会員 佐野 紀元

はじめに

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック開催も二年後に迫ってきた。

私は、東京オリンピックの二年前（昭和三十七年四月）に、県立熊本高校から防衛大学校第十期生として入校した。

一九六四年（昭和三十九年）十月十日（土）の日記に

「第十八回東京オリンピック大会開会式の実況中継をTVで約二時間半観戦した。夢を見ているようだった。全世界の目の前で開会式が整然と行われていることに感動した。自衛隊員・防大生としてすごい誇りを感じた。開会式参加九十三箇国の国旗、大会旗の入場、音楽演奏及び選手・役員七千余名、観客七万五千余名などの晴れの舞台を我々の仲間の自衛隊員が支えている。自衛隊・自衛隊員が協力支援しているから盛り上がり上がっている。この世紀の祭典で日本国を内外に理解してもらえらるだろう。自衛隊に対する評価も上がるだろう。」と。

防衛大学校入校後、オリンピック選手等との縁ができた。幹候校では東京オリンピックの男子マラソン銅メダリストの円谷選手が先輩幹部候補生として入校していた。また普通科中隊長として勤務した十二普連三中隊長は、レスリングのメダリスト宮原厚次選手の原隊だった。

それ以降、オリンピック選手との交流の機会が増え「オリンピックに関わった人とのふれあい」ができ、私の人生の宝になっている。

一 防衛大学校第三学年時―昭和三十九年東京オリンピック―

(一) 聖火ランナー

時期・場所を忘れたが、同じ中隊の後輩S君は、聖火ランナーとして右手にトーチを持ち、神奈川県内をさっそうと走った。私は一般の人々と同じように路上から拍手を送った。

同じ小原台で学ぶ陸上部S君の姿に「東京オリンピック」を更に身近に感じ、防大生であることに誇りを感じた。

(二) 各国オリンピック選手団の先導行進

・ 標識隊の要員の編成・服装

ブラカードを持つ百数名は、いずれも「身長百七十センチ以上、メガネをかけていない二学年（十一期生）及び一学年（十二期生）」から選抜され、「標識要員」として五月の結団式に参加した。

要員の服装は、紺の冬服の上着に肩から白いつり革をかけ、白い帽子、白い夏ズボンに白の短靴、白手袋とキリッとした服装で評判が良かった。

・ 標識隊の訓練

準備訓練は、「体力養成を主とした基礎訓練」を毎週二回、夏休み休暇中も行われた。夏休みになると標識隊は夏合宿に参加し、炎天下の道路上で不動の姿勢、歩行、Tの形をした棒を持ってブラカードの取り扱い等を反復練習した。

私はアメフト部の夏合宿でグラウンド内を走り回っていた。しかし、八月の炎天下、標識隊は白い学生隊舎に向かって不動の姿勢等を長時間やっていた。ほんとに辛い訓練だったろうと思う。熱射病で倒れる者もいた。また標識隊要員に選ばれながら運動部の合宿に参加し、止むを得ず標識隊を外れた者もいた。

・ 開会式まで

現地訓練が数回行われた。指導官は「標識隊の役割は集団の中の一員であることを意識し、各個人の行動によって

終始される。各人の先を見越した冷静な判断と臨機応変の対応が必要である。」と指導した。

・ 開会式

「世界中の秋空を東京に持ってきたような日本晴れ」の中、高らかにファンファーレが鳴り響き、アジアで初めての世紀の祭典が開始された。

「君が代」の演奏が終わった。防大生は、ブラカードを掲げて各国選手団の先頭を入場してきた。夏休みを返上して一週間の合宿、部活動を犠牲にして日々の厳しい訓練を繰り返してきた成果を出し切った。TVを見ながら興奮した。

(三) 後樂園アイスパレスでボクシング観戦

事前に行われたオリンピック入場券の抽選会では、残念ながら抽選に外れた。

十月九日、都内の親戚から後樂園アイスパレスで行われるボクシング予選（夜間）のチケットが送られてきた。「十三日北N」の一般入場料四等級（三百円）のチケットだった。親戚の思いがけない配慮に感謝した。

(四) 代々木の選手村等施設の見学

代々木公園にあったワシ

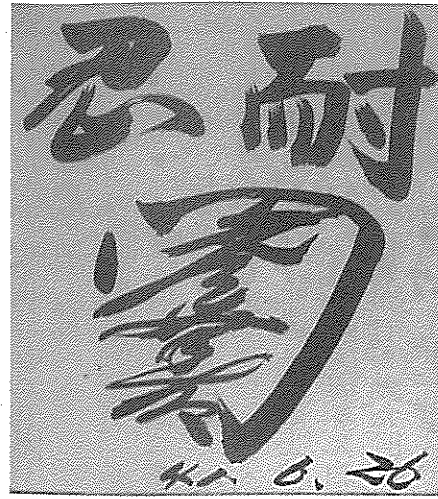


東京オリンピック競技場の横で

トンハイツ（在日米軍住宅）を壊し、オリンピックの選手村になった。自衛隊出身のK氏は、警備会社中途入社し選手村の警備を担当した。K氏の案内で選手村に入り見学した。開会式の行われた国立競技場、駒沢競技場、後樂園アイスパレスなどの施設に行つてその威容、美しさを見て感動した。

## 二 四十期生として幹候校入校―昭和四十一年四月―

「二度とくるめえ」と言われた幹候校（B・Uコース）に入校すると、円谷幸吉陸曹長は、既にIコースで頑張っていた。二年後のメキシコ五輪を目指し、幹候校の訓練の合間に寸暇を惜しんで練習する円谷候補生の姿をみて、私もやる気が出てきた。メキシコ五輪を目指し、課業終了後グラウンドの対角線上をダッシュする姿、外出前に高良山頂まで走る姿、制服が似合い誠実で謙虚な人柄、筋肉質の身体を丁寧にケアする円谷候補生の



円谷幸吉選手からの色紙

一生懸命さが目に焼き付いている。円谷選手は、いつも色紙に「忍耐」と書いた。私は今もその色紙の言葉を大切にしている。私が迷うとき、父は「迷ったら難しい方を選べ。」と教えてくれ

た。難しい方を選択して行動すると何度も「忍耐」が必要になってくる。「忍耐」に慣れてくると何時しか「忍耐」が楽しみに変わってくるように感じた。

## 三 第十一普通科連隊第三中隊長に指定

―昭和五十四年八月 国分駐屯地―

「西郷どん」の里、桜島の見える中隊長室にレスリング選手の大西なパネルが飾られていた。O先任は「鹿児島出身で柔道が強く、我が中隊から自衛隊体育学校に入校した宮原厚次隊員です。」と誇らしげに説明した。

宮原選手がいろんな大会で頑張っていることは、第三中隊の団結の強化、士気高揚につながったと思う。やがて彼はグレコローマン五十二キログラムで頭角を現し、ロス五輪で金メダル、ソウル五輪で銀メダルを獲得した。

宮原選手は色紙に「闘魂」と書いてくれた。彼は減量の苦しさにについても話してくれた。減量するため「過酷な練習で水を欲しくなっても絶対に飲むな。水を舐めただけでも体重は増える。」ということをお話してくれた。円谷選手の忍耐にもつながると思った。

## 四 札幌地本勤務中にロス五輪アンデルセン選手と交流

―昭和六十二年―

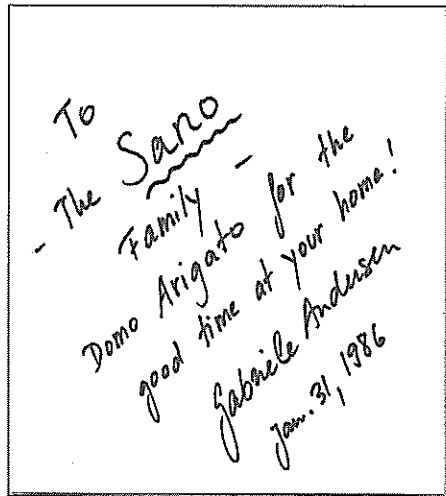
ロス五輪の女子マラソンでフラフラになりながらゴールして世界中から喝采を浴びたガブリエル・アンデルセン選手が我が



アンデルセンと家族

家にホームステイした。アンデルセン選手は、ロス五輪では三十七位でゴールした。「勝者に劣りません。」と実況中継され「最後の十数分に二十数秒を費やし、地鳴りのような歓声」と伝えられた。今もそのアンデルセン選手のゴールに向かう姿が目に焼き付いている。アンデルセン選手は、昭和六十年の大阪国際女子マラソンでは五位、六十二年に大阪国際女子マラソンに出場後、札幌国際スキーマラソン大会に招待された。アンデルセン選手は日本の家庭でのホームステイを強く希望していた。

私たちは、アンデルセン選手に日本の文化や生活、また自衛隊選手のオリンピックなどでの活躍ぶりを話した。中学二年の長女は毛筆で「アンデルセン歓迎の幕」を作り部屋に貼った。小学五年の長男は平岸小学校で友人と共に剣道を披露した。私は円谷選手の誠実・謙虚な人間性について話をした。家族全員でアンデルセン選手の受け入れをできたことに感謝している。アンデルセン選手は、「好きなことを一生懸命やり、決してあきらめない。勝負の相手は自分自身。年齢にも負けない人生をまっしぐら」と語ってくれた。



アンデルセンからの色紙

アンデルセン選手は練習しないと書き、読書などをしていた。アンデルセンは世界中の人とのふれあいを大切にしている。アンデルセン選手の気さくな人柄からいろいろなることを学び、私たち家族は三十二年たった今でも交流を続けている。

## さいごに

東京オリンピック・パラリンピックへの準備が着々と進んでいる。世紀の祭典の成否は自衛隊、自衛隊員の双肩にもかかっている。私はそのような自衛隊のOBであることに誇りを覚える。あらためて自衛隊という崇高な職業を選んでよかったと思う。また、東京オリンピックはじめオリンピックに関わった人々との出会いに感謝している。出会った人々から全人格、たゆまない努力、運の強さなどの影響を受け、私の「今」に活かしている。

二年後のオリパラでどのような出会いがあるか、大いに楽しみにしている。